

## 刊行に寄せて

大学院社会福祉学研究科教授

社会福祉学部長 前田敏雄

かつて本学大学院社会福祉学研究科で学んだ修士諸氏のうちから、その活躍の一端であるとはいえ、このたびこのような形にして研究研鑽の結果が公刊されたことは、まことに喜びにたえないところである。これによって本学大学院における社会福祉学の姿勢を些かなりとも世に示し、本学出身の修士諸氏の今後ますますの活躍を力強く期待するものである。

福祉とは、人のよりよい生き方に関することをテーマとしている。人は誰でもこの世に生を受け、しあわせに生きることを願う。どのようにしたらそれが可能になるか。そのキーワードとしては色々とあげることができるであろう。たとえばセルフヘルプ、ケースワーク、ファミリーソーシャルワーク、グループワーク、コミュニティケア、コミュニティデベロップメント等々である。こんにち使われているこれらの術語を検討してみると、その内容は、私たちの遠い昔の父祖たちが馴染んだ言葉で言えば、さしずめ修身、齐家、治国、平天下ということになる。

福祉とは、生命ある人間がよりよく生きるためには、次なる可能性がうまく開かれなくてはならない。それには、どうしたらよいかを問題にするわけである。それには、先ず以って、自分の身を修めることを知らなくてはならない。そして、家をととのえ、誰でも安心して地域社会に生活できるようにすることである。ところが、ことはそんなに簡単ではないぐらいのことは誰でもよく感じている。

話せば長くなりがちであるが、いつの時代でも大切な、人が生涯かけて生きていくことにかかわるこの根本問題を、さまざまな過去の古い残滓を拭い去って、たとえば少子、高齢、過疎、過密、疾病、障害、貧困、無知等の改善や解決の方途を新鮮に具体的に捉えて解決していくことは、容易なことではないのである。しかし、この論集をその目で見えていくと、今や若い研究者たちの希望の若芽がでて、努力の花の蕾をいっぱい付けていることを其処かしこに感じとる事ができると思うのである。

2006年3月15日